正午の果實

北村初雄詩集

正午の果實

北村初雄

序

私の詩は、進展しつゝ在りと信ずる私の人格の、其の活動そのものたらしめ樣とする願望の、自からの成就を意味する。從つて私が已れを虛しくするところに、私の詩は生れる。

卽ち私の詩が私の人格の活動そのもので在る限り、私の詩は、私の意識に制約せらるるものに非ずして反つて其れを制御するものである。

私の詩は、その一篇ごとに、その香匂と、その色彩とを異にする。乍し、私は其れを私の人格が外界の變化によりてなす震盪を意味するものとは考へずして、寧ろ詩そのものの性質が、しかなすものと考へる。卽ち詩は絕えざる進展を持つ人格の力が、特に緊張されて、詩人の個性の外部へと溢れ出やうとする、ある剎那に卽して生れるもので在るからである。從つて其のある剎那の、しかも絕えず進展しつつあるところの、人格活

動それ自身なる詩が、それぞれ其の Etat d'esprit に特有なる色彩と香匂とを持つことは當然のことと思ふ。しかも其の特有さはひとりの詩人のそれとして其の統一さるべき方面をも備えて居なければ無らない事は勿論である。

私の持つ理想は私の人格の働きそのものの中に含まれて居る。

私の思想は私の性格であり、私の性格は私の思想である。

北村初雄

薄紫の羅針

（少年時代の回想）

一九一八年

――海港横濱に――

川

僕達は進んで行く。河沿ひに緩い歩調を採つて、
默頭ながら微笑ながら、幾度か立ち止りながら、
相互に輕い機會に話をはこばせて、
僕達は兵隊の樣に輕い氣持で進んで行く、
柳の條を搔き分けたり、高い聲を擧げて笑つたり、
柔らかく陰影が映つて行く日傘の中には、
快活で無邪氣な昔ながらの希臘が在る。
相互に御祖母樣達から聞いた、優しい川の傳說を、
こうして愉快な口調で語り合つて行くとき、

水雉は眞黑な二つの細い尾羽根を取竝へて、
川の淀から淺黃色の空へと舞ひ上がり、
その華車な二つの脚元から柔らかい虹が湧き上がる。
僕達い、知つて居る、小さい時、
日曜毎に牧師から貰つた繪札の上の、
藍色に緣どつた白い衣を裝ひ、手を組み交さね、
喜悅の心を罩めて、じつと空を仰いで居た聖母を、
亦、其聖母が優しく川の腕を支えて居る事を。
「處女よ、爾身が上にいや增す幸あれ！」
「君よ、善き冒險の爾身が上におわさむ事を！」
堤の上と馬の上から寧ろな挨拶が交される。
閃く兜と、輝く髮毛と、映ゆる水面、

白い城砦が滑かな芝生の頂上に聳え立ち、
陽が廻り上がる毎に次第に增す水量が、
川に沿ふて勢ひよく黑三稜草をば薙ぎ倒す。
見合す騎士と處女の、眼が外さるゝ川の上には、
啞の舟夫が緩かに漕ぎ下す寢棺の舟！

僕達は歸つたらお祖母樣にもう一遍このお話を聞こうね。
蟬の雌雄が水樹の周圍を激しく旋回つて居る、
僕達は立止り、手を取り合つて空を眺める。
水蒸氣が土堤の委陵菜の鋸葉の上に一杯溜まり、
この牧夫と蝎の二星座が持つ空が黝すんで行く、
川が支流となつた、橋梁がある。

さあ、僕達は別れよう、
あの長い石段を風の上の小さい紙片のやうに、
素早こく驅け上がつて行き給へ、僕は見て居る。
僕達は眞實に愉快だつた、何時もこの調子で行こうね。
僕達の晩禱と朝禱とは、きつちり八時にね。
Aurevoir！ そうして、更めて、Bonsoir！

Juliet

白い襞がJulietの袖口から見え透く刻は晝餐の刻です、
Julietは邸の周圍に外の人達の樣に硝子の植物や、
亦は、辭書の日避けを作らうなどとは少しも思ひませんし、
八月の汗臭い帽子や煽風機が大變嫌ひです、

ですからJulietは僕の讀み差しの詩集なのです。
Julietは重い木靴をはゐて居ます、
そして日に輝く薹がその中から食出て居る刻、
其顔は實に愉快な言葉に滿ちます。
多數の子供がJulietを取巻いで手を叩き、
此處の河沿には一杯に薄紫の碇草が咲くのです。
もうその刻は夏ですね。

和蘭の子供の樣に、
兩端の尖つた白い頭布を着けた田舍者のJuliet。
銀の編棒が青い亦は黄ろい蘭草の絲で作られて行く、
靴下の上を忙しげに走り交し、
Julietの白い衣服か風に橈つて柔らかい輪廓のうちに、

水の反射を受けた品の善い大理石の立像を作り出す、 空の眞下、
じつと伏せた眼瞼の上には海洋の遠い閃めきと、
測られぬ航程を持つた船長の勇敢さが表はれ、
澄んだ其綠色の瞳には、 小さい僕の形姿が寫て居ます、
この空の碧色と歡喜とを背景に。

蚊蜻蛉の翅のように薄い澄み切つた空氣の中を、
汽車よりも激しい音を立てゝ行進する、
空の軍艦！ Julietの指先に粘りつくものは、
小さい丘畑、小さい樹林、小さい河橋、そうして、
細い黄んだ線の幾つかが眞直に昇つて來る煙突のかすかすかす！
然し、それがとても屆かない程ずつと上に僕達は居るのです。
冷たい空氣が、

綠色の水晶の六つの尖角を作り始める刻、
其無邪氣な鍛工は眼に一杯涙を泛べながら、
Julietの髮の上に接吻を繰り返へします。
手を緩く振りながら唱ひ始めるJuliet!

動いて行く畫廊の中に獨り溜息を落しながら、
僕は白い亞羅比亞數字でIと云ふ字を口吟む。
風に飜られた花瓣よりも涼しい容貌を裝ひながら、
Julietは矢筈豌豆の莢で圓い笛を作りはじめ、
數多の子供を湖から野から岡から狩り集つめます。
悉皆で食事をこの樹の下で取りませうかと、喚び出される柳の樹、
其は長い條を水の面に浮ばせながら、
樂しげに過ぎ去つた昔のことを夢の中に建て直ほし、

愉快氣なJulietの立葵の花の數よりも多い笑ひ聲が、
日光の樣に振りかかる僕の胸、風の口唇、子供の肩、
競爭する子供が融け込んで仕舞ふ畑の中から霞が立て、
Julietの從順しい手付で入れる牛乳の中に、
落ち込んで來る一枚の柳の葉。

ああJulietを空しくじつと瞶る僕なのか、
語り過ぎて椅子の傍に寄り添ひながら口を緘み、
紙を擦り合す樣な音を立てる蓬のなかから、
手を擧げて呼び止める白い雲、其は音を立てゝ、流れて行く、
あゝ僕が寄進した村の小さい會堂の壁繪の額に、
しつくりと當て嵌まるあの質素な繪卷。
あのGiotto Di Bondoneの畫いた繪卷の中に、

愼しく僕に輪光を投げ懸けながらJulietは僕の世界を背負ひ、其上、其下、其左右に、廣い、廣い宇宙が溯水の樣に蒼い反射を投げ合せ、Julietの姿相は浮び、そうしてずんずんと昇つて行く！……

幼時回想

小さい掌にのつたChileの古郵便切手が一枚。初雄は今更Jonesと交換した支那の切手五枚が惜しい樣に思はれて來た。切手の上に畫かれたFeire將軍がじつと想ひに耽りながら人を見る面持。肩越に樹の濃い影をその上へ運ばせて西班牙の金貨を投げとばす眞晝下りの光線。風に羽をかすめる山雀の聲。

天竺牡丹の大きな葉が左右に搖り分けられると白色い花瓣のと桃色の花

瓣のとが相互に首を伸ばし合つて、その間に交錯する相。一つの笑ひ。上げられるJonesの袖口の白い綾。地境の五月花の樹の垣根の下の土を啄く柔らかい靴の足音。「姉さんが、君も來給へつて」と云ふ聲に、初雄が急いで隱袋に切手を扭込んでする小さい顋での合圖。誰かしらがする小ぼけな栗色の欠呻。何處までも暖たかいこの日和。下僕が一人現はれて、又、池の周緣の苔蒸した海神の像の蔭へと隱れる。其處から起る輕い咳。

御辭儀する紫色の帽子。それが初雄の肉付の善い頰へと滑つて行く芝生の上の影。音。大空の上で堅琴と鎧との象をした二つの白雲の擦れちがひ。Lyrneが褐色の包裝紙を解くと、現れたのは奇麗な書物。それはSnow-DropやLittle-Thumbやが縺れ合ふ矢車草の花よりひよわいAndersenのお伽噺。東屋まで匂つて來る何か樹の華の香ひ。凛と響くLの發音。Jonesがぴちやぴちやと叩く膝の上のLyrneの白い左の手。一寸。書籍から離れて睨む眞似を

する睫毛の多いその眼。初雄はあどけない口を半ば開かせて無心げに其を見上げる。山茶花の花瓣がちる。蜂。

一つの小話の終り。「さあ、今度は貴君達の番ですよ」。挿繪の妖婆の曲つた鼻の先を中指で、こずき廻す Lyme の微笑む顏。風に搖られながら東屋の樋と四手の樹の枝との間に巣を張る黄いろい蜘蛛。立ち上がつて、背伸びする飼犬。Jomes は姉の膝の上で初雄の手を確かと握る。こうして二人に合唱される「木鼠の歌」。やがて池の方から來る Jomes の伯父さんの荒い足音。飛上がる二人。その胴腰へと飛び付く二人。太い伯父樣の哄笑ひが、二人の上を被ふて際涯なく擴がつて行く。書籍を閉ぢる「ぼうん！」と云ふ音。

一　生

僕は未だ年齢を取らない。でも僕は赤坊になつて仕舞つた。僕は両親をもつて居る。乳母の唄が輝やいて、僕の夢は温たかい。

僕はずんずん年齢を取つて行く。僕は子供になつて仕舞つた。僕は玻璃の笛を持つて居る。日は眞白に輝いて、僕の背中が温たかい。

僕はずんずん年齢を取つて行く。僕は少年になつて仕舞つた。僕は錫製の犀の玩具を持つて居る。印度の砂が輝いて、僕の踵が温たかい。

僕はずんずん年齢を取つて行く。僕は青年になつて仕舞つた。僕は一つの手紙を持つて居る。愉快な顏が輝やいて、僕の心が温たかい。

僕はずんずん年齢を取つて行く。僕は壯年になつて仕舞つた。僕は可愛

い赤坊の聲を持つて居る。白い頭布が輝いて、僕の額は温たかい。
僕はずんずん年齢を取つて行く。僕は老人になつて仕舞つた。僕は大きい手やら小さい手やらで組れる大きな環をば持つて居る。限りない空が輝いて、僕の全身が温たかい。

僕はもう年齢を取らない。到頭僕は死んで仕舞つた。僕は毎日種々な祈禱の聲を持つて居る。この快活な魂が輝いて、僕の灰は温たかい。

印度洋

心地よい朝の日光を浴びて、
Laughter と云ふ遊戯を行つてゆく。

輪を圍んだ子供達が笑つて居る、
空に投げられた手布が地に落ちる迄。
僕は將棋の駒の王樣といふ風に。
細長い顔を四角張らせて、身動きもせず、
この庭の薔薇の葉の間から見透される、
青い海をば眺めて居る、
其處には確と嬉しそうに泳いで居るに違いない、
竹麥魚や鮋や帶魚や鯛の群。
栂の角ばつた葉が日光に映えて、
僕を全り愉快にならせる、彼の子供達の笑い聲。
僕は默つて其れを聞き分けてゆく、

風を孕んだ帆の滑車の軋りや櫓の音から。
「初雄さん、遊ばない？」此時、
芝生づたいに走り寄つて來る、
眞白な眞白な可愛い子。
僕はその手を取りながら、靜に尋ねる、
「君のお父樣は船乘だつてね？」

「あゝ僕のお父樣は大きな汽船の船長だつたの、
然けれどお父樣が汽船に乘つて、
印度洋を渡つて居られるときにね、
お酒を澤山頂だいて直ぐお風呂には込つて、
腦充血と云ふ病氣に罹つて死んで仕舞つたの。」

子供の眼に這る青筒の大きな汽船たち、
其は青い空の上に、大きな雲と成つて懸つて居る。
あゝ、巨い海洋！　巨い海洋！
然うだ、僕が一橋を卒業して、
里昂の會社にでも勤務る樣に成つたなら、
僕は印度洋を渡つて行こう、
然して、汽船が船長の水葬された所を通過るとき、
僕は帽子を脱つて挨拶しよう！
「僕は貴君の可愛いお子樣のお友達で、
姓なら北村、名ならば初雄と申します。」
薔薇の花の搖れが止まつた。海は凪いで居る。

子供の眼からは曇りが去つた。

僕は自分が話し始めるお伽噺の世界に引込れられて、青い潮流や人魚のむれや薄紫の貝殻の中で、印度洋と子供の顔とをじいつと見較べる。

公園

搖ぶる圓い肩から僕の投げた矢車草の花瓣が地上に落ちる。其は紫色だ、白色だ、薄桃色だ。行こう！　あすこに一つの椅子がある。しかも樅の樹の陰影になつて居るじやないか！　芝生の上には草の葉が白靴の裏から突刺しはしないかと思はれる程、勢ひよく伸びて居るし、褐色の雀達は悉皆あすこの激しい傾斜のある屋根の上に集まつて囀ずつて居る。空はその薄青い花瓣だ。光つて居る、行こう1

何故君ばつかし話をして僕に話をさせないの。僕はもう全り聞き疲びれて仕舞つた。ほうら見たまへ、あんまり君ばつかし話をするものだから、君の日傘の中に、黒蟻が一匹おち込んだぢやあない。拂ひ下して仕舞ひ給へ。眩しいなあ、君の瞳は！　あの伯父樣、ほら公園の五月花の生垣を細い筇杖で、輕く打きながら此處へ來る人があるだらう、あれは伊太利人さ。あの人の子供達は悉皆女の子でね乳母さんがついてよくこの公園の砂遊場に來て居るよ。噴水の水が止つて仕舞つた。あんなに群集が集まつて行く。ほんとうに欣しい五月だ。僕はすつかり汗をかいて仕舞つた。

飴菓子を買ほう。さあ手をだし給へ、一つ、二つ、三つ……こんだけ在れば善いね。黃ろい銀紙のを頂いて見給へ、薄荷の味かするから。ほんとうに善いお天氣だ。君のスコッチ糸で編んだ帽子が眩しくなる程光つて居

る。君、甘しくはない？　此樹には蝸牛が住んで居ると見えて、羊齒の葉の樣にぎざぎざした白い筋で幹の上が一杯だ。滑々した筋は幹の二股となる所で止まつて居る。あつ！　其處に居るんだ、甲殼の渦卷が黑つぽい莢葉の上で搖れて居る。花壇はずつと向うだのに、こつちまで善い匂ひがする。あゝ、空も椅子も芝生も皆すつかり、善い匂ひがする。君の掌まで其の匂ひで一杯だ！

英吉利國旗が白い柱棒の先に卷きついて居る。風がちつともない。龍舌蘭の白色で緣どつた刺のある厚い葉がつんとして植込の中に伸びて居る。君はすつかり默り込んで仕舞つた。蒸暑いなあ！　公園には芝生の上に晝寢をして居る人ばかりだ。太陽は丁度僕達の頭の上で燃えて居る。君は全り周邊が靜寂なので、雀の啼聲が大變耳に響く樣な氣がしない？　椅子の上の矢車草の花束を手に取り給へ。そうして元氣よく海岸に行こう。海は

蒼色い繩だ。澤山の建物の屋根や圓屋根やが其上で繩飛びをして居る。行こう、元氣よく！　眞實に今日は善いお天氣だ。

友達

僕は長い堤に沿ふて下る川の中に、
青い背と白い腹を持つた魚が一尾、
跳ね上り、跳ね上りして一杯に飽ちるまで、
空氣を喰べて居るのを眺めました、
日が温たかで。僕の背がこげる迄。
魚が、やがて嬉しそうに白い泡を吐きながら、
尾鰭で藍色の十字を切つて沈すんだ時、

僕は默つて長い溜息を吐きました。
蘭草がずつと伸び上がつて、優しく、
小さい花が幾つも水へ垂れ下る。

僕は可愛いお友達を知つて居ました。
搖れる風の群から、迂る川の光から、
僕は今は只その聲音の鞘だけ見るばかり、
小さい墓銘、そうして僕は一人ぼつち、
岩の上には萎れた花が、
咲いて、開いて、散つて仕舞ひました。

僕は指先で青い粘土を捏ねながら、
風に縺れ合ふあの白い上衣を、

亡くなつたあの愉快な上衣を想ひました。
黒藻はうす緑の花を一杯つけて居て、
重ねる掌からは一すぢのけむり。

魚が泳いで居る、絶えず水と話を交しながら！
僕はじつと緑色の羽虫を仰ぎました。
音もない翅のふるへ、ほんとうに空のように、
澄んで居る柔らかいその翅の下で、
僕は聖母を想ふ、聖母を想ふ。

學者

空は眞青だ。恒子さん僕はあすこ迄君を差上たい、僕の腕は短いけれど。

其して恒子さん、君は木製の大きな椅子に腰かけて、靜つと、動いて行く
この地球を見て居るの、空の上から。

併れども僕は此處に居て市街や畑と仲好ね、地球と一共に囘轉つて行くの、
元氣よく、唄ひながら、手を振りながら。

さよなら、恒子さん！　さようなら、初雄さん！

其うして恒子さん、君は望遠鏡に眼をあて、、地球の上の推移に氣を付け
て、其をちやんと手帳につけとき給へ。

其うして僕は三つの樂しい季節の推移を持つて居る。僕も順々に、其を手

帳に付けとこう。

君はいつも此春ばかり、Kabul や Damascus を通過る時、恒子さん、一寸然い
かもしれないけれど。

こうして日捲が三百六十五回捲くり取られると、恒子さん地球が一廻轉し
てまた元の位置がやつて來る、

恒子さん、君と僕とは抱き合ふ。其して、君と僕とは手帳を取り交す。

僕は讀む。海が眩しい。支那人が黄龍の甍のある寺から首を出す、蒙古人
の黒い天幕、白い砂漠が續いて行く……

君は讀む。人々は冷たい綠の水を欲がる。大黄色の陽。氣温が百度に騰る、鰺が釣れ、麥が熟て行く……

恒子さん、君は季節の變化が、僕は土地の變化が、如何に面白いか分るんだ。恒子さん、眞實に愉快じやないか！

空は眞青だ、恒子さん、僕はあすこ迄君を差し上げたい。僕の腕は短かいけれど。

晝過

空を見ると、空は眞青、
川を見ると、川は眞青、

野を見ると、野は眞青、
さあ、行こう！
雀瓜が秋唐松草にからみついて、
その後に日が老人の眼のように霞んで居る。
その日が熱い位に僕達の背中を照して居る時だつたね、大きな虻のように、
僕達が兎馬の頸にかじりついたのは。
其兎馬が莫連芝草をお甘そうに喰べて居た時だつたね、兎馬の頭を撫でたのは。
僕達が先刻丁班魚をとつた水溜は、
最早すつかり澄んで居て、畦蓮の花が、
全で聖窟のマリヤ様の眼のように薄紫に咲いて居る。

丁度水の上の郵便屋と云ふやうに、
脚長の水馬が金銀蓮花の葉は間をゆき廻り、
僕達は蹲んで、
其水面を通つて行く雲のかたちを、
眼も外さずに默と眺める、一つも殘さずに。

眞實に善いかたち！ ねえ、
希臘の古英雄達があんなに澤山空の上に居るぢやない。
其處の葉と花との間には、
アガメムノンとアキレスが仲直りのお酒を飲み合つて居るし、
其花の上には、
獅子と戰つて居るヘルクスが其縮髯のなかで笑つて居る、
又、此處の葉の上では、

一眼怪物が「誰でもない、誰でもない」と叫けんで居る、
可愛相に。
然れど、利巧なユーリセスは何處かしら？
その菱の葉を上げて見給へ。

僕達は沼菖蒲の一杯咲いて居る道や、
南京豆の黄ろい花が一杯咲いて居る畑道を、
眞面目くさつて歩るいて行く、
全で小さいホメロスが此處に居るように。
方々の畑で午蒡の葉が白く飜がへり、
羽を唸らす毛切虫。
僕達は立止る毎に、愉快げに手を搖りながら、
空の面を眺め廻す。

昔なじみの希臘人のお友達で、空は一杯！
川は葛の葉と花の中に埋もれて、
僕達の足を、滑込ませる貌牛兒草。
草蜻蛉が水枝の上に、
じつと置く薄い翅が風に搖れ、
靜かに川へと崩れ込む粘土の塊。
僕達は眺める、
川の中の二本の足を、
百合の花のように眞白に動いて行く二本の足を。
小さい川魚が長い列を作つて通り過ぎた後には、
水馬と澤瀉と、
昔なじみの希臘人のお友達で、川は一杯！

空を見ると、空は眞青、
川を見ると、川は眞青、
野を見ると、野は眞青、
さあ、唄をう！

Ballade

僕は馬に騎る。馬は花の中を走つて行く。
碧い雲が水脈の樣に連なつて消えて行く。
僕は馬に騎る。馬は花の中を斷いて行く。
僕は馬を停め、薄紫のLilasの花の中に、

麥藁色の鞭を擲げる。日は輝く花の上に、
僕は馬を停め、水嚢から一息に綠色の水を飲む。

僕は帽を脱ぐ。一枚の白い胸甲。褐色の馬の鬣。
美しい聯隊。聯隊長の黄金の兜。光る蜂。
僕は想ふ、噴水の傍に待つ西班牙の王女の顏を、

僕は馬の腹に拍車を當てる。馬は走る空の上を。
背を屈めて僕は避ける、紅い霧、黒い霰、虹の橋。
僕は馬の背上で胸が彈ける迄に想ふ、西班牙の王女の聲を。

日は硝子の樣に輝いて居る。川は水色の舟を浮ばせる。
畑の中には甜瓜に南瓜に胡瓜に冬瓜の黄ろい花。

立話、豚と牡豚は丘の上に、羊と犢は磧の上に。
果粉に塗れた百姓小屋。兩手を叩く可愛い子。
馬は國境標を跳越へる。花の香匂、嵐の息。
轡の上に映つて行く小さい白い西班牙！

僕は馬を下りる。馬は疏菜畑に辛大根の葉を味はひ、
果樹墻に沿ふて息を彈ます僕の黄金の胸、甘枸櫞の花。
日は蒼穹に、時辰雀は野中に、正三時。

三光鳥が小さい喉を一杯に月星日と啼く合間、
勇敢な接吻が白い手頸の上に擲げられる。
圓い口唇の上には可愛い小鼻、其また上には圓い眼。

緋色の肩布がゆさぶれて夢見勝な聲音が云ふ。
樂しい事を、悲しい事を、嬉しい事を。寂しい事を。
僕の心は魚のように、引揚網の中で跳ね返る。
聖母像が噴水の中から枝垂柳に虹を懸渡し、
眼瞼の上に、小さい微かい產毛の上に、小猫の上に、
縺れたり解けたりする頰白鳥の聲、僕の聲。
美しい眼、可愛い眼、然して美しい眼、王女の眼。
——然してね、あのね、あのね、然うしてね……
美しい眼。可愛い眼、然して美しい眼、王女の眼。

煙つて居る岡の小徑。僕は歩み、僕は淚を流す。
愉快な會話。山撥鼠の背の樣に柔く波立つ橙樹の林。
雉子が驅け上がる赭土の阪の上に日が萎んで行く……
薄紫の鞍枕！ 王女が摘む Lilas の花に馬は被れる。
僕は蹲む。燻金を懸けた蜀葵の花の傍に、
時間が果實の樣に喰べて仕舞ふ樂しい心、白い顏。
僕は歸營しなければならない。美しい聯隊長の黃金の兜。
黝んで行く胸飾の上に花を差す柔かい物腰。柳の葉。
潤んだ眼、可愛い眼、然して潤んだ眼、王女の眼。
充ての陰影が地上に下りる。馬の鼻革の上に圓い月。

Adieu!　Au Revoir!
白い手布。小さい溜息。消えて行く砂烟。蹄の音。
僕は馬に騎る。馬は花の中を走つて行く。
碧い雲が水脈の樣に連なつて消えて行く。
僕は馬に騎る。馬は花の中を斷いて行く。

鹽原にて

さあ、此處に鶩觀草が在る！
此は恒子さんの手だ、
此は妹達の手だ、
此は雅子さんの手だ、

さあ、唯にも上げるものか！

花隱豆の朱色の花をからました垣根に沿ふて、
西洋南瓜の大きな果が轉がつて居る。
僕は一人、彼方は五人。お日樣は道の上に、
然うしてその餘光が溝の中の溢草の上に、
僕は鶩觀草のこんなに大きな束を持つて居る。

手で幾許でも捕まへられる朱蜻蛉、
その澤山な蜻蛉の群の中で悉皆の襟元をくすぐり廻す、
鶩觀草のこんなに大きな束、
さあ、恒子さん退却し給へ！　妹達も！　雅子さんも！
驚いて飛び上がるミノルカ種の雌鷄の下から、

啼きながら黍畑へと逃げ込む十羽の雛子。
何時の間にか彼方でも摘みに摘んだ、
鵞觀草のあんなに大きな束。
川に懸けられた一本の丸木橋の上を、
雌鶏を先に十羽の雛子が行儀よく渡つて行く。
輪を取り巻いて、
眞裸で見物して居る百姓の子供たち、
僕は充分に防ぎ止めながら、
磧へと出る、看麥娘と蟹釣草とを踏みながら、
川は葛の花と葉に被れた崖に沿ふて下り
この兩岸にはお湯が自然に湧いて居る

赤松の幹を楯としながら息を彈ます僕達、
芝生の上に、ぽつんぽつんと丈をば伸す捩花。
蛇が行く！ 川の上を、頭を上手にあげながら。
お日様も何時の間にか、
松の葉や楊の葉から釣糸を、川に垂れはじめ、
僕達は葈耳の眞圓な刺の一杯ある實を捩つては、
肩に背中に胸に擲げかける。野唐松の小さい黃ろい花の間から、
丁度、この時、風に乘つて來る晝餐の知せ。
悉皆に捨てられる鵞觀草の大きな束。
萎みきつた夕顔の花が、連なつて風に搖れて居る、
樅の木の下の百姓家の一軒屋、
その年取つた木の頤から生れ出る、

青い髯の瓩葦。
暫て鷄たちが花を一杯持つて居る、
胡麻畑の根元の土を啄いて虫をあさり始める時、
急に丈高い岡虎尾草の間からわめきだす。
今迄がつかりして口を開けて居た百姓の子供たち、
蔭干にされて居る桑の枝の間から、
其聲にすつかり驚いて、
突き出る、子供の顏、眞黒な顏、笑ひ顏。

さあ、仲直りの握手をしよう！
恒子さん、手を！
妹達、手を！
雅子さん、手を！

僕達は勢一杯に笑ひ倒ける。——

Kuzuka

Ma-lo はコサツクの言葉にて「なんて少しなんでせふ」の意あり。

小さい捕鯨手のお内儀さんは膳棚の戸を開けた時、さも愉快で堪らないと云ふ風に笑ひ聲を立てました。
「まあ、未だ此んなに果膏が殘つてるわ、彼の人が海から歸つて來て居らつしやると三日位で無くなつて仕舞ふのに！ 眞實に彼の人は頂きたがつて居いでだらうと思うわ、えゝ確つと。でも海に在つしやるのだからお魚は一日に百でも千でも頂けて善いわねえ、三毛ちやんや。」
するとお菓子でも頂戴するのかと思つた小猫が鳴きました。Mee-oo, Mee-oo!
其がお内儀さんには Ma-lo, Ma-lo! と聞こえたのでお内儀さんは吃驚して、

「まあ！」と申しました。

然つどね、其のお內儀さんの旦那樣はずつと昔に海の上で抹甲鯨に吞まれちやつて居るのです。カーチャー

鯨捕手の小さいお內儀さんは撒水器を持つて庭に出て來た時、さも愉快で堪らないと云ふ風に笑ひ聲を立てました。

「まあ、此んなに大きな日向葵が咲いちやつたわ。彼の人が海から歸つて居らつしやると、何なにお喜びかしら！ でも青い海にお住でなのだから、毎日、澤山な矢車草の青い花をご覽になつて居らつしやるのと同じだわねえ、三毛ちやんや。」

するとお菓子でも頂戴するのかと思つた小猫が鳴きました。Mee-oo, Mee-oo

其がお內儀さんには Ma-lo, Ma-lo! と聞こえたので吃驚して、「まあ！」と申

しました。

然つどね、このお內儀さんの旦那樣はずつと昔に海の上で抹甲鯨に吞まれちやつて居るのです。カーチャ

捕鯨手の小さいお內儀さんは日捲りから一枚めくり取つた時さも愉快で堪らないと云ふ風に笑ひ聲を立てました。

「まあ、今日で丁度三年たつてよ。彼の人が海に行かれた日に赤ちやんが生れて居るとすると、もう歩けてるわねえ。食卓の向うに居るとすると妾が云ふのよ、さあ肉汁をおあがり、麭麵は此處にあるよつて。眞實に面白いわ、でも彼の人も海に隨分長く居つしやるわけだわねえ。三毛ちやんや。」

するとお菓子でも頂戴するのかと思つた小猫が鳴きました。Mee-oo, Mee-oo

其がお內儀さんには、Ma-lo, Ma-lo! と聞こえたので、お內儀さんは吃驚して、

「まあ！」と申しました。

然つどねこのお內儀さんの旦那樣はずつと昔に海の抹甲鯨に吞まれちやつて居るのです、カーチャ

捕鯨手の小さいお內儀さんが重い病氣に罹つた時、身內のものが一人もなかつたので小猫に遺言するより外に仕方がありませんでした。

「彼の人が海から歸つて來られたら云つて頂戴ね、妾の墓の側に樅の木と棗の木とを植えて下さいつて。然すれば寂しい秋には小さい棗の果が風に鳴つて陽氣だし、寒い冬には樅の葉が雪を避けて吳れるし、一年中が氣樂だわ。でも、彼の人に餘りお願ひしすぎるかしら、三毛ちやんや。」

するとお菓子でも頂戴するのかと思つた小猫が鳴きました。Mee-oo Mee-oo
其がお內儀さんには、Ma-lo, Ma-lo! と聞こえたので全り元氣になりました。

然れど可愛相な小猫はお菓子を貰ひ損ねて仕舞ひました。何故ならお內儀さんは安心して死んで仕舞つたのですもの。

「然つどね、この小さいお內儀さんは、極樂で、抹甲鯨に吞まれた旦那樣と今は大變愉快に暮して居るんですつて、カーチャ！」

La Risette（ラ リゼツト） 一九一九年

Sa fille avait grandi parmi ces chants, et osn
âme entière n'était qu' un tendre lied, une directe
expression de Nostalgie et de l' Aspiration—Novalis

わが小さき amie de la famille に。

輪舞
—序詞—

ゆつくりと廻つて居る人の輪は、
日光に照らされて青く眼にうつる。
其は人の聲だ、其の人の優しい面輪だ。
白い羽を空へ昇せるのは。

（影に涵つて居る橅の樹。）

人の跼む姿も人の伸び上がる姿も、
空をうつす池のやうに、一樣に美しい。
花のやうな少女の身體は、この

人の輪をうつとりと霞ませる。
温かい涙を眼に溜めてゐると、
人の素直に育つて行く態や、
人の喜ばしげに話す言葉やが、
白い鷄のやうに仄かに羽搏く。

（小さい掌のなかに神樣がゐて、
花の光と匂ひとに涵りながら、
人を思はず微笑させるやうな、
惡戯を待ち構へて居る。これは
人の考へられぬ昔から……）

輕い足音は夏の雨。
ゆつくりと人の輪は廻つて居るが、
心の動搖は馬より走る。
一人の少女を捉まへやうとすると、
日よりも駈ける。

（風に搖れて居る樹。）

空を凝視めて居ると、心が、
湖のなかの魚のやうに澄む。
人の落ちついた色彩は、黒い眼と共に、
踊つて居る身體を引き緊める。

（日當りの善い土地の、
麥の穂は重く俛だれる。）

人の輪は愉快そうに笑ひながら、
廻つて居る。廻つて居る。それは、
日光に照らされて青く眼にうつる。

Adieu

さようなら！

振返ると、まだ笑つて居る小さい仙女、
日の中に眩しそうに眼をしかめて、

ぢつと此方をむいて、まだ笑つて居る。笑つて居る。

さようなら！

振返ると、まだ笑つて居る小さい仙女、
樹の影に涵つて居るあの白い額は花のやう。
風見のやうに此方を指ざす可愛い眼。

さようなら！

振返ると、まだ笑つて居る小さい仙女。
あの栗毛色の髪の毛が燃えて居る、燃えて居る、
お寺の屋根に巣を懸ける鴻の樣に眞白に。

さようなら！

振返ると、まだ笑つて居る小さい仙女、
藁火のあとの烟のやうに、何時までも、何時までも、
續いてのぼる笑ひ聲、あの柔らかい頬の波立ち樣。

さようなら！

振返ると、まだ笑つて居る小さい仙女
僕はもう堪らない、堪らない、もう一遍！　そう！
薔薇の花が、胸の上で激しく、激しく搖れる。
大きい接吻。小さい接吻。

さようなら！　さようなら

花

ぢつと花を眺めて居る黒い睫毛の上に、
黄ろい蜻蛉のやうに日光が憩むで居る。
子供は膝の上に手を交ね、
仙女のやつて來るのを待つて居る。

白い花辨が風と出會ふ赤い鉢のほとり、
子供の黒いエプロンが陶器のやうに、
光澤に白く光る、この四月の朝。
何を想つて居るのかしら、小さい頸を傾しげ、

子供は默つて考へて居る、柔らかい日景の中。

花の匂ひに充ちた子供の髮毛の黄金の輪、
その周圍をかすかな羽音を立てゝ蜂か廻る。
子供はふと眼をぱつちりと口を圓くあけて、
青い空を仰ぐ。其處にも青い薔薇の花。

ほんとうに許嫁の眼のやうに優しく、
子供の心はうつとりと花の上に注がれる。
海から吹いて來るこの藍色の風の上に、
仙女の足音は聽ゑないかしら――默！

話

明るい食事部屋の一つの食卓を中に挾むで、
桃心花木の椅子が二つ据えられる。
暑中休暇が、その兩親や妹たちと一所に、
この山莊へと運むだ小さい生徒の、圓い口唇が、
緩くりと啜つて居る、大きな肉汁の匙の間から、
時々現はれる愉快な眼。その度ごとに、
人形を膝の上、ひとりの子供が頷ずく微笑。

語りだす話におもはず油がのつて、
搖ぶる肩から肩へと飛び跳ねる輝かしい花虻。

子供は人形をそつと膝の上からずらしながら、
眼を圓くして聞き惚れて居る。温かい日光！

小さい生徒は話を一寸途切つて、得意そうに、
可愛いゝ夾竹桃の花の樣な顏を眺め、扨て、
偶意とらしい溜息をこと更、重く吐きながら、
水の影が混がり合つて居る天井を見上げる。

話をはつた小さい生徒の口脣の上に、
聽き終つた小さい子供の眼の上に、
忽布の花のやうに仄のりと色ずいて來る、
綠色の小さい微笑……

窓ごしに靜かな湖水が一杯に擴がり渉つて、
白い花模樣のレエスの窓帷を曳網の中の魚のやうに、
圓く膨らませては激しく搖らめかす涼しい風。
白塗の小蒸氣が蒼い滑らかな水上を走り過ぎると、
その青い烟りが二人の睫毛を柔らかく暈らせる。

手帳

—舊稿—

曲り迂つた文字が消されたり、
書き加へられたり、揉み消されたり。
僕の中學一年生の頃の手帖は、
僕の手垢で眞黑、そうして
其れを見ると寂しくなる。

重ね合す掌のなかに、
其を挾み、僕はぢつと俛れる。
粘りつこい鹽風と一しよに、
この拙ない筆蹟の上に、
仄のりと濕つて居る白い墓碑。

僕は知つて居る、
あの人が隣人で在つたこと、
あの心地よい微笑とを。
乍れど、其つきり！　其つきり！
柔かく小松の葉がふるえて、
海の風がいま通つて行く。

然う！　僕は幸福かしら？
この海の風を聽きながら、
明るい笑ひを湛えて、
僕を眺めた人を知つて居る、　この僕は！
（あの庭には黒い蘇鐵の葉が押し擴がつて、
　其下には薔薇の木が一株あつた。）

乍つど、
曲り迂つた文字が消されたり、
書き加へられたり、　揉み消されたり、
僕の中學一年生の頃の手帖は、
僕の手垢で眞黑、　そうして、
其を見ると涙が一杯……

眼

—歌謠—

日に暈つたり、　また
身を轉して仄のりと輝ふて來るあなたの眼、
小さい口唇を窄ます樣にして居ると、
あなたは全で鷄のやう！　あなたは全で豆の花！

時計の象牙の分針のやう
前に踏みだす一足ごとに、　話し懸るか、　微笑むか、
元氣よく、　薄綠色の忽布の花の花飾り……
蛙のやうに空へと跳ねるあの藁帽子！

あなたの眼は、僕の眼。
僕の眼は、あなたの眼。
全で綾取をでもする樣に風を掠める小さい姿、
眼の中に、
河があり、懸橋があり、坊主頭の葱畑がある。

海の青さに濡れながら、海の光に醉ひながら、
帆を捲き上げた船長が此方を向いて話すやう、
青い野菜畑を背にして此方を見つめる。ばあ！
あなたは本當に海の白い水沫。

日に昃つたり、また、
身を轉して仄のりと燿やうて來るあなたの眼。

小さい口唇を窄ます樣にして居ると、
あなたは全で鷄のやう！　あなたは全で豆の花！」

祝祭

—終詞—

青い芝生が、
なだらかに丘を起し、丘を沈めて、
走つて居る。この光圏。
栗鼠の背毛の温たかに、
青い空をば映す頃、

白い上衣を着けた子供たちが、
一つの青い圓丘の上で、

輪踊を踊つて居る。青草の、
薄荷のやうに爽快しい香匂が、
渦をば巻いて空へと昇る。

虎斑のやうに、
子供たちの白衣を掠める、
雀の群が、
快活な鯖の鱗のやうに光つて行く。

　春！
　春！
　春！

可愛い脛や膝頭の群たちが、

搖めく風光のその中を、
焔の中を、
光の鞠を蹴り上げて行く、ぐんぐんと。

　春！
　春！
　春！

遙かの湖水に水をば汲みとり、
雲を作つて、
南へ進む、
風に、
撒れる花々のその匂ひ。その光り。
　春！

春！
春！
ぱたりと止まる、
圓舞。
足を停めた子供たちは、一對づゝ、
向ひ合ひ、
につこり笑つて、頷くと、
歩み寄り、
相互に、
草の莖で相手の指をば確かと縛る。
指環。

大空の水溜の、
白い反射が光つた蝗の群のやうにと、
跳びかけて行く、子供のむれに！
其れが青い空氣を、
圓るく取り巻き、笑ひに崩す。
春！
春！
春！

純白の乾舷標

一九一九年

熊田精華氏に

——わが最も親しき友なる——

花

—序詞—

優しく顫へる花々が身をうつ伏せて、
透きとほる鏡の上に光りを映すその頃ほひ、
褐色の食器棚の白い食布と皿との間から、
一日が口を窄めて笑つて音なく消へる。
挿繪の生きた群々が花の匂ひに濡れひたり、
母の眼内のやうに鮮やかに白い子供の時代をば、
女の額の上に息づかさせる、こころの眞夏、

日に照されて夢が風景のやうに晴れわたる。——

薔薇の花

僕の大好きな、大好きな恒子さん！
小さい頤を斜めに傾げ上げながら、空を見ながら、
着物の白い襞を風にひらひらさせながら、
僕の大好きな恒子さんは立つて居る。
咲き溢れて居るあの青い薔薇のはな。
恒子さんは光線の戸口を背にして、
両手を高く差し上げて其を採うとすると、

充ゆる花の蕋が黄金色の笑ひ聲となつて
空も庭も花も全りその愉快な谺に搖れ合ふ。

中指を唇の上にあてゝ小聲で何かひとり言。
雀たちの縺れ合ふ空を恒子さんは見つめながら、
花の匂ひを嗅ぐ樣にそうと顔を差し伸ばす。
あの花は踊つて居る。 あの花は踊つて居る。
あゝ空に搖れて居るあの青い薔薇のはな！

僕の好きな善い希臘の神樣たちは、
あの青い花の蔭に涵りながらお話しをする。
僕もあのお寺の司敎さまの樣にむつちりと、
默まつて居るあの黄金色の髮毛の袈裟をゆさぶつて、

この温かい日指の中、 本を讀もう、 話をしよう。

高い屋根、 低い屋根、 その波だつた群の上、
黑い煙筒からゆつくりと薄紫の烟が登ぼる空、
見給へ！ フリジャと黄水仙の明るい配合の中、
僕の大好きな、 大好きな恒子さんが立つて居る。
首都の空には薔薇のはな！ 青い青い薔薇のはな！

子供

ひとりひとり人達はみんな善い母樣のように、
背中の上に可愛い子供をおぶつて居る、
人達が日の樣に燿かしげに笑ふとき、

子供たちも米搗きの木槌のやうに手を叩たく。
振返つた人達は、さも堪らなそうに、あ、は、はあ！

ひとりひとり人達はみんな善い母様のように、
背中の上に可愛い子供をおぶつて居る。
人達が黒い雲のよう悲哀の雨を注ぐ時でも、
子供は猶ひきつけるように激しく笑つて居る。で、

一寸ふりむく人達は亦ひとりでに、あ、は、はあ！

この僕の背中の上には誰が居る、誰が居る、
其は極り切つた恒子さん！僕の好きな、大好きな。

僕は笑ふ、僕は泣く、然ども矢張あ、は、はあ！
近頃ちつとも會えない事を思ふと悲しくなるけど、
でも恒子さんを知つて居るのだ。此僕は！

街の中で一人の學校の友達に會つたとき、
ぽんと僕の背を叩きながら覗き込む樣に、
「君、憶ひだせないよ微笑むで居る顔しか！」
「ぢやあ君も始終背中を振返つて見る居るね。」
僕達は微笑みながら此云ふ風に、仲善く話す。

お月樣の背中の上にはお日樣！
僕の背中の上には恒子さん！
僕達が大人に成つて行くように推移はあるけれど、

ひとりひとり人達はみんな善い母樣のやうに、
背中の上に可愛い子供をおぶつて居る。
人達は振向くたびに腹中を搖らして、あ、は、はあ！

春

背を伸ばしたり、手を搖つたり、
紫色の矢絣の可愛い子供がぐるぐると、
圓い影が僕の背から轉げるところを、
温かい春の日景と一共に跳ねまはる。

笑つて、笑つて、死ぬほど笑つて！

勢ひよく綠の葉つぱが小猿のやうに、
榛の樹の黒い小枝へ一杯攀ぢのぼり、
白い雲が今にも煙つて雨となるかのやう
和かく遙かの青い空から湧き上がる。

笑つて、笑つて、死ぬほど笑つて！

宏い公園の中、青く霞むだ人がひとり。
向ふの灰色の長椅子の上に蹲まる。たゞ、
陽炎が白く身體のまはりに搖めいて、
彼方も、此方も、——そう、春！

午さがり

恒子さんは一人百合の花を摘むで居る。
黄ろい花粉がその白い衣服に塗れて、
花虻と長腰蜂とを招いてゐる。
髪はもう五月の雨に濡れてゐるかの樣に、
黒く潤ひ、あの快活な眼を憩はせる。

この春、この恒子さん、これは神樣の贈物。
僕の誕生日の贈物。
僕の睫毛に虹が縺れて居る。僕の眼は潤んで居る。
僕は黄ろい菜の花を取り上げて、
其田舍風の臭ひを味ひたいと思ふ。
灰色の狼すら日向ぼつこをする筈のこの日指、
實に穏やかな長閑なこの青空の下。
僕は無理にも樂みたいと焦心つて居る。
僕は知つて居る、僕は知つて居る、
彼の許嫁のような眼を知つて居る――。

僕は果樹墻に沿うて、緩くりと、
恒子さんを驚かさない樣に廻つて居る。
小犬に戯れたり、草や樹に水を撒いたり、
恒子さんの額はほてつて居る。僕は大好きだ。
僕は恒子さんが大好きだ。然れども僕は話し懸けまい。

黙つと恒子さんを其儘にして見て居よう。
僕の花の樣な昨夜の夢と、
僕の花の樣な今夜の夢とを、
巧く繼ぎ合せるものは眞實に恒子さんきり！
恒子さんは芝生の方へ繩飛びをしようとしてゐる。
僕は話し懸けようか……懸けようか……

振り向くと眼下の穩やかな湖水の上には、
白塗の小蒸汽が一筋の水脈をば曳いて、
青い烟を吐きながら、緩くりと、
島嶼と島嶼との間を巡り拔けて行く。

背の方で燃ゆる樣な恒子さんの笑ひ聲……

朝の匂

柔らかい息使ひが規則正しく洩れて來る朝の子供部屋に私は風の樣にしのび込む。子供は寢て居る。俛むき勝な額を横に臥せて深く白い敷布の中にめり込むで居る顔。花模樣の付いた羽蒲團の青地の羽二重の縁飾りの下から小さい兩手が人形の淡桃色の繻子の手袋の樣に出て居る。

朝方の蒼い時間が柔らかい色彩を以つてこの小さい身體を飾り立てやうとして居る。褐色の雀たちも起きない。鶫たちも白いイリラの花を搖らない。

私は黒い革嚢を開いて銀の鋏を採り上げる。子供は輕く寝返りを打つ。二つの掌が寝床の縁に俛だれる。水沫のように仄かに浮び上がる小さい欠呻。懸時計が三時を打つ。私はほつと溜息を吐く。

私は千一夜の中に出て來るバグダットの醫者の樣にこの頸と二つの手頸とを切り落す。私は其等を素早く柳で編むだ手籠の中に入れる。そうして再びほつと溜息を吐く。

私は舟の樣に部屋を滑り出る。

部屋の中は默として居る。森の樣に蒼い霧。ヴネチヤ製の花瓶の上に書かれて居る人達が寝むたげな眼差しで雲雀の唄を待ち疲れて居る。ロココ式

の華麗な郊外遊宴の圖。愛神の惡戯を企らむ腕先にも睡眠が憩ひ、青い湖水の漣も響を立てない。路易王朝を恒に夢みる工人の手になつたハプシコードの鍵盤の上にはマリ・アントワネットの優しい心が佇むで居る。時がたつ。

私は再び靜かな足調をもつて現れる。私の額には輕い汗の粒。私の外套の上にも白い露の粒。私は手籠をおろす。私は疲れを癒すために身を反らせた後、ぐつたりと華奢な椅子の上に身を落し、それから徐ろに手籠を開く。

花の匂ひ。

私は子供の頸を取上げてもとの所にと收める。

花の匂ひ。

私は子供の掌を取上げてもとの所にと収める。

子供の眼は未だ閉ぢられて依然として柔らかい寢息が聞える。風がその顔の上を通りすぎるとジエルソミノの花の匂ひが融けて來る。風が手の上を撫せると薔薇の花の香りが帆を上げる。私は子供の口に眞白い花輪を差し、子供の手に眞紅の花輪を握らせて來たのである。

身を伸ばして唇のほとりを強く吸ふと、ぱつちりと子供の眼が開く、朝の四時。物象の輪廓が瞭らかな線を取つて來て、日光が窓を訪づれる。

耀く黄金の頸飾。

私は子供をだき上げて更に強く接吻する。

通信簿

夏雲が湧き上つては白い氷柱のやうに、
崩れて消える日光の充ちた青い空。
二階の欄干に身を凭らせて、ぢいつと眺め、
溜めた吐息をついては輕くせ伸びをする。

幼い中學生が一人、詩を作つて居る。
この日中、この靜けさ、白い障子の上に、
羽叩いて居る緑色の昆虫を押へて放つと、
微かな響を立ててそれは空へと融ける。

鉛筆を舐めてみる、詩集を展いて見る、
欄干の上に手を滑らて顔を伏せる。
　舵を握る。
紺碧の海洋……

もう續かない。手帖を机の上へのせて、
悲しげに物憂げに手をぐつたり。
ふと耳を澄すと學校からもどつた妹が、
母として居るらしい話し聲。

元氣よく階段を昇つて來る小さい足音。
兄さんご褒美！　今日通信簿を頂いたの。』

微笑が仄のり翳らす白い小さな齒竝び。
中學生が父でもあるかのやうにする咳拂ひ。
「全甲なの、全甲なの、全甲なの、それとね
兄さん、それとね、乙がひとつ……」
展げた掌を壁にぴたり、おづおづと兄を見上げる、
顏に嬉しさが溢れむ許り、

……………………

部屋の中には亦しずかに時が流れる。
身を起し顏を上げて空を仰ぐと微かな風が、
過ぎて行く雲の白い冑のかたちの間から湧き上がり、

中學生は頭を振つてまた眼を閉ぢる。

棺の側

——セルビヤ民謠——

ねえ、お母樣、お醒めにならないの。
もう八時を廻りましたの！
寂しいお部屋は音もなく、
薔薇の香が溢れるばかり。
お母樣のお顏は白い花。
周邊は全かり朱の花。

恍とりと、花々に、
見惚れる子供。

ねえ、お母樣、お醒めにならないの。
もう八時を廻りましたの！……

IN MEMORIAM

カブリエレ。ダヌンチオ

お祖母樣に

(われ汝に語らむ
おゝ答え給へ！　ハムレット第一幕四場)

本當に彼方は美しかつた。銀のやうな髪、恵み深いあの微笑、時折、身體の痛みを、ぢつと耐えて居られたお祖母樣！

彼方は眼の中に持つて居られた。物靜かな優しい憂心と、その深い眼眸に惹き止められる人たちに何とはなしに敬ひ心を起させる樣子とを。

あゝ、見える、見える、悲しみの餘り長い歎息と共に、白いお頭を靠られるお祖母樣が、亦この僕が吃驚して聲を震せながら、

お願ひですからお祖母樣、悲しがつて下さいますな。

と云ふまゝに優しく僕の胸を抱き寄せて下さるお祖母樣が！

＊＊

僕はあなたの足元に座つて居る。あなたの燃ゆるやうな一つの手を僕の手に、も一つの手で僕の頭髮を撫でて下さり、不思議な精靈に生き生きとさせられるかのやう話して下さる。

僕はぢつと聽いて居る。あなたの聲の波の上、僕の小さい魂が逃げて行く、逃げて行く遙かな世界に見知らぬ光の海を横過つて。そうして、あなたは僕と一所に翔むで行く……

不圖、あなたは口を噤まれる。あなたの頰が朱色に眼が二つとも輝やいて呼吸が深く苦しくなる。僕は咽元で泣き出したいのを我慢する。

あなたは微笑みながら慰撫して下さる。

―さあ、こつちを御覽、こつちを御覽。もう全かり癒つたよ。これは大した事では無いのだよ。

＊＊

ある日、僕たちは小さい庭の徑をば歩るいて行く。心に寂しさを充たす秋の、この二つの影のひとつが空のあたりに凋れて居る。

徑の上、ばさり、ばさりと音を立てるこの落葉は世に亡いひと、お葬式と云ひながらお顏を見上げると眼鏡の下、あなたの眼は泣いて居られる。あ

ゝ、お祖母様！

僕は感じる、此處僕の胸の中に悶えに充ちる懼れをば。縄で喉をば絞められるやう。どう云ふ譯か解らない、僕は墓場のことを考へる。

――お祖母様、とまつて。一寸の間ね。疲れられたでせう……すこしね。けつど直ぐ善くなられるの。そうぢやない？

***

若々しい太陽の黄金のひかりの中にくるりくるりと旋る燕たちの唄の間に挾まつて、花をつけた桃の木、薔薇の木、黄水仙と菫の花、花のお祭り。

お星さまを鏤めたやうな花壇を過つてあちらこちらと僕は素敵な蝶々を追ひ駈ける。座つてお祖母様は居眠なさる。風があの方に呀やくが、如何お

話があるのか僕は知らない。

一抱えの花を見つけて其を摘み、お祖母様の前をば飾つて仕舞ふ。すると心が僕に不思儀なことをば話す。

すると僕はフリユニールの山のことをば想つたりまた巨人たちが番をする、若さを與える眞白の花のことをば考へる。

***

冬、あなたは、あなたの細いお顔のやうに眞白なリボンを結ぶ小さい頭被ひを着けられて、夜毎レースを編まれる、洋燈に近く座つて、圓卓子の傍に。

僕、僕は聖書を早く敎つて、あなたのお側に飛んで行つては蹲まる。あな

たから青い巨龍やゲラン・メスシーノのお話を聞くために。

然して僕が寢かゝると、僕の部屋まで連て來て、寢かしつけて下さる、接吻をして。

そこで眼をば閉ぢると花の中、輝かしい、然して僕が想ひ返えすことが出來ないやうに褪めやすい、色んな物が踊り出す。

＊＊＊

基督降誕祭には、銀の星、東邦の博士たち、また羊飼や羊の群を伴なつた小さい秣槽が作られる、野原に、穀粉ですつかり眞白な。

其晩、この僕がする、暗誦を、撒彌を唄ふやうな聲でもつて短かい一つの説教の。するとこの善い惡戯のため、撫せて貰つたりお菓子を澤山頂だける。

それから遲くなつてから寢床に僕を伴なつて、僕にあなたは此うおつしやる。—ねえ坊や、今晩神さまのお使ひがどんなに善いお年玉を持つて來て下さるか、そりやあ誰も到底わかるまい？

そうして僕が夢をみながら微笑むでると、あなたは飴菓子や小錢を一杯、枕

もとにそつと置いてをいて下される。

昨晩すこしも面白くない乾涸びた本を讀むで疲れてから、全り悲しくなつて寝床に行きました、心も重く、頭も重く。

僕は、ずつと遲くなつてから眼を閉ぢました。然して僕は銀の髮、聖のやうに素直な微笑、聲震はせて話される、全り光耀いた僕の小さいお祖母様をば見ました。

あの方はたくさんの懷しいものに付て話されました、春の薔薇や、青いお庭や、海の夜明や、緑の海を。

然して今朝、カナリヤ達が籠の中で唄ひ始めると、僕の心、僕もまた空の

唄に搖れ出しました。

（以上の詩はダヌンチオが未だ十四五でプラトの學校に居た頃の作。）

圓舞　（シャルル。ヴン。レルベルジュ）

あなたの圓るい腕をお置きなさい、私の腕の中に。
私の腕の中にあなたの腕を、薔薇色の、圓るいの。

圓舞をひとつ踊らない。

圓るい妾の口唇、圓るい妾の乳房、
盃のやうに、葡萄のやうに。

妾は圓るい薔薇の花冠をのせてます、
妾の長い黄金の髮毛に、柔らかい、撓のよい。

あなたの薔薇色の腕をお置きなさい、私の腕の中に。

頃も夜更のお月樣、
頃も夜明のお日樣、

素肌の妾の腕、ブロンド色の妾の髮毛、
妾の接吻、其して最後に妾の心臟。

世の中で一番美しいものと言ふならば、
其はみんな圓るいもの。

圓舞をひとつ踊らない。

晩秋

椅子が搖れる。
英吉利ネルの明るい服地。
ひわ色の窓帷の蔭から洩れる温かい日光が、
長い睫毛を、
一杯に涵して居る、
この朝け。
圓卓子の上の、

二つの紅茶茶碗から立ち昇る、
二すじの白い靄。
喉をひと口うるませ、
眼を止める、
青い空。

冷たく光つた、
空氣の中を、
音もなく下りてくる、　圓るい黄葉。

輝いた、
明るい谷のやうに、
しませう、

この冬も。　……

煖爐と、
お話と、
湯沸器の音と、
Mozart とでね。　……

優しく目眸をなげ合つて、
再び搖り始める、
椅子の端に、
波を打つ白い踝。

烟のやうに、

華奢な夢を周邊に燻らせながら、
椅子の胴に、
靜かに顔を寄せかける、
晴やかな口元に、
綠色の小さい影をつくる、
笑靨がひとつ――。

生

―茅野先生に―

Ich lebe mein Leben in wachsenden Ringen,
die sich über die Dinge ziehn—Rainer Maria Rilke—

光る指先には夏の日が憩むで居て、
風が來ると矢車草の花のやうに搖めく。
見上げると、
天では藍と白との二色が靜かに融けて、
眼のなかに遠い海の水泡のやう。

生きて居るのだな。
温い日影の中を翔りすぎる白い翼のはためきに、
ほつと溜息を吐いて、
首を傾げる。

宏い――。

搖れて居るあの蒼海色の萱の群は、
春から秋へとかけて何時しらず伸び上がる。
然う！
然う！生きて居るのだな。

光る手。
照らす夏の日が和らかく掌を通り過ぎると、
白い雲が匂ひのやうに湧く。——影。

花
—終詞—

灯す洋燈。座る女の頬へと朱く影が伸び上がり、
お伽噺に身を躍らせては欣しげに花々は搖めく。
聲もなく、ただ眺め、ただ笑らふひとりの女のほとりを、
温かい言葉が雪解の上の陽炎のやうに燃えめぐる。
輝やくふたりの夏の遙かな國の境につづき、
憩ふ身うちに微かにも鶏の羽叩く蒼い明方、
Bluet の花々は凭りそふ眼ざしにと崩れ落ちて、
彈ます息の煙るなか女の姿は雨よりも靜かに遠のく。

靑葦の群

一九一九年

柳澤健氏に

一時

砂を凝視めて居る。
空の中の青い鳩のやうに明るく、
聲を矢車草の花の間に彈ませるのは、
幼い子供の時の基督。

閃めく白い粒。
草の匂が馬の鬣を掌のやうに撫で、
冑をつけた虫が樹の洞に住ひながら、
空の青さに見惚れて居る。

海は全圓。
草の上に憩むで居る羊たちが輪をつくり、
Bagdad のお祭りのお話を聽て居る。
日が山楂子の葉をひろげ始める。

魚が跳ぶ。舟が滑る。
小作地に耡の刄を燃して居る人達は、
長い柄の上に手をのせ、頤をのせて、
風を見送つて居る、眼を上げて……

日輪

恒に東から西の方へと吹く風を受けて、

黄金の圓い止木の上、吹き流される、
一羽の白い鷄の鳥冠が、
靜かに帆を孕ます風に搖れて居る。

柔かい目眸に、白い髯を波立たせながら、
巡錫する古の聖者達、
刈込むだ小山の圓頂に、長い耳を立てゝ、
兎馬たちが歩るいて居る。

夏の終り、澄んだ空の上、
幼い友達の手をとつて黍畑の側、
靜かに見交し、笑ひ始める時、
白い鷄は啼き、首俛だれ、

西の方へと沈み消えて行く……

會合

一條の烟がくゆり立ち昇る、
空の藍青、
地の黄綠、
樹葉と小犬の交はるところ。

斜面を日光に燿かす死火山が、
空を劃つて白い靄を棚びかせ、
畑をめぐる小徑が湖水に下り、
許多の葡萄。

跳ね上る小さい獸、白い毛並、
ふと見下す葡萄棚の蔭に、
圓い顏、其の淑やかな立すまゐ。
手を擧げる、風の中！………

杜世忠

（建武四年北條時宗元使を斬る）

白夾竹桃の花勾に充ちる室内、
纖細い足の運ひを確かと堰き止め、
噴煙のやう、日に燃やす哄笑の一群。
約婚の契りを結んで指ざす蒼天。

馳走する星々と波浪とを眼下に、
身を搖らし、身を搖らし、
蒼い海霧の中、手摑む彼の眞白い微笑！
海原を潮流に沿ふて、横過る海峽。

來歷の一閃。力を罩めた彼の抱擁！
日本の山水を映す刀身のまへ、
噴煙のやう、日に燃やす哄笑の一群、
齡と戀とを、身より斷つため、
靜かに、今、前へと差し出す猪首！

旅程

一九一九年

*

香高い牧草を踏みしだき、
一人の子供が歩るいて行く、
空の青を身一杯に浴びながら、
額を上げて歩るいて行く。

元氣よく、兎のやうに躍り跳ねる、
その白い素足は薊の刺を、
薄の葉擦れを恐れない。
彼女は前を見る。然して彼女は歩るいて行く。

白い窓枠に縁取られた、
夥多しい光に充ちた風景の中、
私は認める、彼女を、遙かの丘に。
其處で私は帽子を取り、部屋を跳び出す。
眩しさに眼を顰め、方角を見定め、
私は大股に歩みだす。畑を見捨て、
原と林と森とを後に擲げやつて、
山を攀ぢ、彼女の跡を追つて行く、
白い布を古雅に縫ひ合せた、
上衣一枚、髮を解きほぐし、日に灼け、
子供は敢然と歩るいて行く。

額を空へ、彼女は默し、彼女の足は迅い。
道が樣々な勾配を採るため、私達の足は、
水に涵り、澤を分け、蘭を手折り、
亦は楢と樺との茂みの間に、分水嶺を、
遙かに見下す事もある。輝く空氣。

跫音は彼女を驚かさない。彼女は歩み續ける。
私は近ずく儘に彼女に尋ねる。——誰です？
乍し、言葉は草の匂ひを帶びたまゝ、
空氣の中に虛しく融ける。光る踝。

私達は無言の儘で歩み續ける。

私は肩を刺す丈高い草を振ひ除け、
彼女の背を、上衣の下に現れる腓を。
蒼窮から來る光の中に見詰める。

生き甲斐がある！私は今日、初めて、
均整をこの小さい身體に學ぶ。
實に善い、實に善い。
世の中は想つて居たよりも美くしい！

＊＊

日が暈る。その都度、
草原に影が充ち、

子供はぐん〳〵と歩るいて行く。
喜悦が地にある。喜悦が天にある。

紺碧色に空が涵たす、
際涯のない白菊の群を横過ると、
道は勾配を作つて、一帶の灌木林となり、
身體一面が日に照らし出される。

――貴君は生れました。
不圖、言葉を背越に擲げて子供は、
簇葉を除けて、云ひ續ける。
――妾は生れました。

林を拔け、鰐の樣な赭岩の上を、
因幡の兎のやうに跳むで行く。
勇敢なその足許を追ひながら、
私は氣を晴れやかにする。

私は彼女の言葉を悟ると、
足踏も強く岩石を蹴り落しながら、
微笑する。微笑する。微笑する。
心の中に充ち擴がる限りない陶醉！

⁂

金黃色の空。空が靜かに燃える。

暮れるな――と私が想ふ間もなく、
蒼青色、黒色、其間を走る淡緑調、
宵を飾る星々が仄のりと現はれる。

月光を浴びる子供の踵、
深い靜寂の中に、風の群が搖めき、光り、
白鳥星座、琴座、蝎星座と交はつて、
冥界に去つた偉大な魂達が輝き始める。

子供は快活な足調を迅ませる。
私達の祖先の祖先が嘗つて名稱けた、
瑞穂の國は八つの島を海に泛べて、
遙か眼下、眠り、かつ夢みて居る。

私はこの月を愛する。この星を愛する。
次第に稀薄となつて來る空氣に、
私達の昇上を感じる。交はる足音。
子供は猶もぐんぐんと登つて行く。

＊＊
＊＊

地がたえる。子供が振り向く。その微笑！
私は無意識に立ち止まる。全身が前倒る。
深い呼吸。其が聽て胸一杯に喚び迎える、
激しい鼓動に、眼を開らく。

風が迂ねつては消え、また光る。

私は身慄ひを押し止めるため、
亢上りに亢上る。子供は立つ。
蒼い月光の下に私は其を見詰める。

——樣々な土の匂ひに、
　私達の足は塗みれて居ます。
彼女は光體の本源でもあるかの樣に、
靜かな、かつ爽やかな微笑を洩らす。

語尾の震えを消すために、
口早に語る、私の答を俟つて、
子供は靜かに手を差し伸べる。
深い呼吸の中に私もまた。

見上げる天が眼先に連り、
手を取り、私達は歩みはじめる。
か丶る時、生れる古代の神々、
涙が溢れる、靜かに、靜かに——。

生の燔祭

一九二〇年

漁獲

—矢野目氏に—

古の漁夫は、
漁る手を憩はせ、
はろばろと、
海を、
望む。

擲げる。銛を！

澄むだ水面は一樣に波立ち、
魚は躍り上り、

空の中に、青い脊鰭が、
華を展かす。

海面にゆらゆらと、
立つ、透き拔る水蒸氣の群が、
日に映じ、
漕座に立つ、
戀人を咽せばせる。

明るい微笑！

海の波は油脂のやうに重く迂り、
腕は、確かと櫂を握る。

心地よく哄笑する。
舳の海豚の首飾が、
崩れむばかり。

風が帆を訪れる。
海と天とを限界ない背景として、
立ち並ぶ、
戀人の肩並に、
皆白い飛沫、

日景に時を知り、
帆を西へ傾むけ、
戀人を右手に抱き、

航路を按ずるために、
むづと座る。

古の漁夫。
柏手を柏つ。さて、
しづかに、
聽く。
遙かの反響。——

INSVLA NATA

From the earth thou springest
Like a cloud of fire;—Shelley.

宏い海面は正午の日光の中に、
希臘の女達のやうに水浴する。
その頸、その乳房を、象るものは、
群れ上り、群れ下りて、魚を啄く鷗。
一面の深藍色が眼先に擴がる。

日光は佛陀の頭上に燦めく、
圓光のやうに環流を彩り、

海上を駛り廻る！
翼ある氣流と香匂。

生れる海泡。………

微風は目禮を取交しながら、
光の矢を遁れ去り、不圖、
海の中央、かの鰡の群が遊泳する、
日輪の眞下、微かな響を伴ひ、

生れる海泡。………

始めて花の香匂に充ちた、

透明な空氣を飲みゐふる、
眞白い肉體のやう、
爽やかな海潮の生れるところ、
花環を懸ける鷗の一列。

遙かの方から駛つて來る、
驟雨が目睫の間に霽れ上がると、
子供のやうに聲をあげる微風。
海波から柔かい音樂が起つて、
浮び上り、虹を分ける。

生れる海泡。……

空の青さの中に展けてゆく、
正午の百合の花辦のやう、
湧き、溢れ、充ち、擴がる、この
眞白い海泡の眞中にあつて、
今、

空をめがけて上がる一島嶼！……………

冬

—熊田氏に贈る—

風窓から白い柔毛が雲のやう、
吹き込むで來る谷ゐひの一軒家。
かづ知れぬ海鳥が圈を作つて、

激しく其の屋根上を翔びまはる。
姉は氣遣しげに見詰めながら、
時折、その蒼い額を撫で上げる、
その間、妹はその纖細な手を取り上げて、
和かく其上へと口を寄せる。

白い寢臺を窓側にちかよせて、
七歳になる弟が臥つて居る。
曇る玻璃板を透して見える、
黒い岩、小さい空地の僅かな綠。

海鳥の羽の擦れ合ひが、

鈍い明るさを保つ灰色の空から、
落ちて來るこの一室。

光澤な褐色の卓子の上には
木製の馬が首を傾けたまゝ立つて居る。
繪本の群が其を取り卷き、その傍に、
菓子が素燒の鉢に盛れて居る。
海鳥の啼く合間、合間に、
靜かに二人の姉に問ひかける、
その眼は何かゞ欲しいかのやう。
花瓶から散る薔薇の一ひら。
いつ知らず潤むで來る弟の眼。

二人の姉は白い枠椽に飾られた。
亡い兩親の繪姿に心を勵ましながら、
手布で拭きとる其の涙。

姉たちは小聲で訊ね合ふ。
乍し寂しげに再び眼をば落すばかり。
弟は喘いで居る。弟は喘いで居る。
蒼い影が部屋を領して、微かな吐息。

「さあ何が欲いの、裕さん。」
意を決した姉達が問ひかけるまま、
向き返つて眼眸をむけ、弟は、
また寢返つて空を見詰める。

「僕ね、見たいの、
お日様が…………」

頰

光が頰に觸れ、
その色合となる剎那、
其の清澄な感じが消えて
現れる溫かさ、また重さ。

色の起伏は柔かに、
眼先に煙りゆくその間、

一色の明るむところ、
一色は影をつくり、
共に湧き上げるその調子。

黄の中の色映ゆる赤。
赤の中に波立つ黄。
立ち廻るさまざまの色彩は、
雨霽れ上る風景のやう。

この明瞭さ。この素直さ。
眼に見えぬ一色が、光を越え、
己れを現はしてゆく其力。
色は融け、色は溢れる。

生々しさ！

ひとが融け、さながらに、
充ち擴がる空氣の中、
見詰めるままに、
浮きあがる、わが全身！

風

――稲田稔氏に――

空から來て、
松の葉を、
風が搖る、

手のやうに、
和かに、かすかに、
動く葉。

向ふへ、向ふへと、
葉の間から、
光と洩れ、

空へと、また、
吹いて行く、
風。

日の下に、
搖れて居る、
青い松の葉。
この眞晝。

季節

手に取り上げて、しげしげと見入ると、
自分の魂が一つの骨董品の樣に乾凋びて居る。
日光が落ちると窪味が浮き上つて、
快活な緑黄の色調となつて光を放つが、
日光が消えると、灰白色の老齢が落ちる。

宏い畑地に農作物が輝いて居る
軌道は蒼穹の中に融け込むで居るが、
太陽の軌る音響は、
透明な燃え立つ空氣を、數里四方、
絶えず波の様に搖つて居る、
聲もなく。

四季が絶えず、
影を落すこの魂の池は、
今。春を感じる。子供の生毛！
水面が溫み眞白の鵞鳥が、
泳ぎ廻る。その黃ろい水掻と柔かい胸毛とに、

恍惚として、その映像を、
全面に行き、渡らせ、その甘い擽ゆさに、
心持よく身を震はす。樂しい戰慄！

暗い池底の一面が、夕暮の、
金色の佛像の顏々のやうに打ち沈むで居る。
日が射し込むと、
醱酵物のやうに浮び上る魚群。
可愛い奴め！魂が呟く。自分は其れを、
假寢の中に、微かに聞く。

日光に自分の生命を預けてあるかの様に、
その照り具合で、魂が憂鬱となり快活となる。

理性と因循と怯懦とが此處に折り重なつて、
自分の魂を一つの骨董品とする。
自棄氣味に、自分は光澤を出すため、
擦りに擦る。駈足だ！　駈足だ！　時が過る！
然う！　希望する！　希望する！　希望する！…………
突如、
灼く蒼穹が頭上に擴がり、
乳母のやうに、
光、熱、その透き通る空間の搖床を以
この魂を慰す！
僕は跳ぶぞ。僕は躍るぞ。
魂が生きた!!!　目醒めた!!!　夏だ!!!

墓碑の群

死んだ者なんかないんだ——チルチル

その遠い際涯が水蒸氣のために、
薄紫色に霞むで見える宏い草原。
日を受けて、風が
綠色を白色に、そつと搖る。
野面に全るで人が作つたかのやう、
行儀よく立ち列び、
恍とりと手を繋いで、
灌木の群が黄ろい花飾をつけ、

環を廻らす無音の圓舞。

ふと、足を止め、
顔を擧げると、
澤山の人たちが、思ひ懸けなく、
群れて居る。
全でお祭りの日のやうに、

灌木の群に取圍まれて、あちら、こちら、
ぢつと立ち止つては、話し合ふ人達。
優しい會話が香煙のやうに立ち昇つて、
柔かく蒼穹へと融けて行く……

日が照らす欣し氣な顔々。
胸が大きく、大きく波打つて來。
僕は思はず話かけ、手を差し出す。
人達のあの姿！　あの姿！

髯を生した誰かのお祖父さん！
聞えない。たゞ人達は微笑むで居る。……
乍し、この心は温かさに充ち、平和に充ちて、
言葉が翳のやうに落ち、また閃めく。……
僕の言葉だ。然れども亦、あの人達の言葉だ！

青々と生ひ立つ灌木の中、
此の世となく、彼の世となく、

静かに、静かに、移つて行くこの日景。
息づまり、火照る頰。
難有う！………

散策

—西條八十氏に—

枝を突き出す。擴がる綠！
明澄な空氣が、
日景の中に燃え上つて、
移動する雲の群に觸れると、
樹一杯に搖めく日光！
帽に斑影、頰に微風、

小刻に、緩りと小徑を歩るく。
日と若葉と土との匂ひ、
身を轉すと、
堤に倒れる。頰をさす草葉。
水のやうに湧いて來る、
初夏の歡び！
確と握つて、眺める拳に、
眩しい程の日光の破片、
生の充溢する血脈の隆起。
その上を、一匹の蟻が、
匍つて行く。

寝返つて空を仰ぐ。
遍く、ゆき渡る光の分散に、
眼を顰め、深さを測ると、
思はず、
この全身が、
空へとのめり、
落下する**心持**。

日が燿き、樹葉が展け、
徐ろに躍動する世界に、
沈滯の一點、

この**心**！

日中

ぱつちりと、
展いた眼。
濡れて居る、
喜び。

蒼い翳を落とす、
空。
睫毛の下に灼く、
微笑！

微笑！
身體中を跳び廻つて居る、
ぴちぴちとした、
一寸法師。

顔が、
一寸、傾く。
髪の毛が額を撫でる。
その白。
その黒。
それが融けて居る、
温か味。

魂の、
花のやうに素直な、
優しい、
心を罩めた贈物。
この空氣！

鳥のやうに、
羽搏く、
聲。聲。聲。
其れが融けて居る、
青空！……

凡てを、

搖つて居る。
陽炎。

少女。
僕。
日輪。

接吻

確かりと、
この眼を以つて、この心を以つて、
相互に、
凝視める。

睫毛の影に涵たる、
瞳は、
夏。
綠葉、
映る。――
顏一杯に、
漲つて居る、
生々しさ。
その光耀。その香氣。
恍とりと、
瞬かす。

充つ、
生活。
充つ、
活力。
戀人がある、
この僕にも！
　微笑！
　顏が炎る。

默つと、
凝視める、
瞳に、
迸しる、

この全身！　この熱禱！

…………………………

出す。
手。
顫ふ。——
　靜けさ……

APOLLO

DAPHNE は河神 PENEUS の嬉。彼女の美しさに心惹かれたる APOLLO 彼女をひき捉えむとせしに。彼女は救ひの祈りをなして。一本の月桂樹と化しぬ。

湧き上がる、感情を抑へ、
跳ひ立つ腓を確と捩じ伏せ、
俺は見る、
DAPANE を。

眞白い、
裸體。

草を握る、
俺の手が顫えて居るのは。
草の間の、
俺の眼が霞むでゐるのは。

胸。
烈しい脈搏が俺に告げる、
波立つ血の循行を。
喘ぐ。喘ぐ。

水蓮の圓葉と、
其の花の群の中に、
息づいて居る、
肩。

その背筋に、
緑色の影が涵り、
生々とした一線を畫いて居る。

其は双方の隆りの、
美しい友情を思はせる。
花。

温かい圓味が、
柔かく旋つて行く、
濡れて居る肉體。
心持よく日光が其上を滑べる。
風。

輝やける肢體！……
世界を循り、

世界を生かし、
世界を育くむ、
この火！
俺だ。俺だ。俺だ。

心持よい柔軟性を見せて、
俺の觸覺に、
媚び、
水母のやうに融け込む、
優しい肉體。
手摑むか！

…………

虚しく、
伸べ、
展げる、
手……
掻き捞る頭髪を、
ぐいと引き上げ、
香り高い水草の中、
俺は見る、
空を。
搖れる、
青。

一本の、
樹。
其れを廻つて、
白雲の群が通り過ぎる。——

相模灘

眺め入る、
この手、
砂に潛り、
其上を潮が寄せ來たつては靜かに引き下がる。
男一匹の腕節。おもむろに

隆起する肩胛。
此處にある、この
體軀。

凝つと自らの精神と姿體とを眺め、更て、
心肝の一點より、眼叩く。
見上げる赫灼たる天體は、靜かに、循り、循り、
海洋は擴がる。

力を罩めてこの腕を前方へと差し伸ばす。
胸の鼓動は昂まり、昂まり、
頰は熱する。
擲つ！

ああ、石は落ちる、眼近に――。
波は立ち、波は碎ける。
生。
意圖。
全心を轟く海洋の展舒に、音なく、涵す。

向上

――稻田稔氏に――

先生！　先生！　先生！
日當の善いあの小學校の敎室で、

むかし、
聲を張り上げ、
答へるために、机の上から身を伸せてまで、
差し上げた此手。

先生！　先生！　先生！
力を罩めて、確かりと、
今も、この今も、
喚び、
差し上げて居る、生命に。

昔、あの小學校の先生たちは、
私の無邪氣な答に、
頷いて、
日光の燃えて居る髯の中で微笑された。

眼を輝かせ、生命は、
この生活、この勉强に、
心から悦むで、
大聲を張り上げて笑つて呉れるで在ろうか？

關はない！

生活の息を彈ませ、
燃やし、
前へとぐいぐい進ます。來い、

私が生活の中へと織り込むで行く、
運命の資料たち！

無限
――茅野先生に――

天は、
なみなみと小供の手に、
海洋の光を充たす。
一息に飲み終る。
口のしずくを拭くと、
子供は微かに笑つて、

またも差し出す。

跋

—再版の序—

肩越に歩むがままに擲げる石の群は、希臘神話の中の懐しい二人によつて、次々に其れは長い髪もつ女となり、輝く眼をもつ男となり、温かく照る日ざしの下、温かい微笑の華のむれの中にかくして二人は次第に身を埋らせて行つた。——

此れは一つの宗教傳説、一つの口碑として、静かに搖めく燈下の優しい唇から受用して、祖母の手を輕く叩つ子供に恍とりと物おもはさせる所の厨房では無い。其れは優しく己れの過古を省みる人の唇のほとりに泛ぶ微笑の繪解きである、そのうす甘い微笑の味ひを創世紀この方の「人間」が嘗めて見た其の味ひである。しかも己れの釀した酒に濡れる唇頭の感覺は恒に

現在の己れの其れである。其の味感は過去と言ふ生活様式のうちに、現在の意識を一切の現實的規約の縛めから脱せしめて意の向くがまま、自己具象化せしめるところの一つの人間的遊戯に據つて、激成され、强調される。詩集「正午の果實」は私が肩越に歩むがままに擲げた一つの石である。背後に立つは少年期を終へて青年期を迎へ入れる頃ほひの人の姿相である。其れは藍色の花の群の中に優しく絶えず息づき、絶えず融け込みがちである。

稲門堂主人の囑によりて家藏板なる詩集を再版する日

北村初雄

目次

序

薄紫の羅針 一九一八年

川 …… 二
Juliet …… 五
幼時回想 …… 一〇
一生 …… 一二
印度洋 …… 一四
公園 …… 一八
友達 …… 二一
學者 …… 二三
晝過 …… 二六
Ballade …… 三一
鹽原にて …… 三六
Kuzuka …… 四一

La Risette 一九一九年

輪舞―序詞― …… 四八
A dieu …… 五一
花 …… 五四
話 …… 五六
手帳―舊稿― …… 五八
眼―歌謠― …… 六一
祝祭―終詞― …… 六三

純白の乾舷標　一九一九年

花――序詞―― ……七〇
薔薇の花 ……七一
子供 ……七三
春 ……七六
午さがり ……七八
朝の匂 ……八一
通信簿 ……八六
棺の側――セルビヤ民謡―― ……八九
IN MEMORIAM　カブリエレ。ダヌンチオ ……九〇
圓舞(シャルル。ヴン。レルベルジユ) ……九九
晩秋 ……一〇一
生――芽野先生に―― ……一〇四
花――終詞―― ……一〇六

青葦の群　一九一九年

一時 ……一一〇
日輪 ……一一一
會合 ……一一三
杜世忠 ……一一四

旅程　一九一九年

生の燔祭　一九二〇年

漁獲――矢野目氏に―― ……一三〇

INSVLA NATA……一三四
冬――熊田氏に贈る――……一三七
頬……一四一
風――稲田稔氏に――……一四三
季節……一四五
墓碑の群……一四九
散策――西條八十氏に――……一五二
日中……一五五
接吻……一五八
APOLLO……一六一
相模灘……一六七
向上――稲田稔氏に――……一六九
無限――茅野先生に――……一七二
跋――再版の序――……

大正十一年三月廿五日印刷
大正十一年四月一日發行

『北村初雄詩集』　定價金貳圓五拾錢

著者　北村初雄

發行者　東京市牛込區早稲田鶴巻町四三九番地　小柴權六

印刷者　東京市牛込區早稲田鶴巻町四三九番地　鶴田理治

印刷所　東京市神田區今川小路三ノ二　株式會社一匡印刷所

發行所　東京市牛込區早稲田大學前　稻門堂書店
電話番町一二九八番
振替東京一五五番